

J・M・ピュイレモン編

フランス国立図書館所蔵満洲本目録

神田 信夫

先年、大英図書館(British Library)やロンドン大学東洋アフリカ学院(School of Oriental and African Studies, University of London)所蔵の満洲本を主とする『ロンドン現存満洲本総目録』(Manchu Books in London, A Union Catalogue, London, 1977)が大英図書館より刊行され、世界の満洲学界を裨益するところ多大であったが、このたびフランスの国立図書館(Bibliothèque Nationale)より同館所蔵の満洲本の目録が発刊された。相次ぐ満洲本目録の出版は、満洲学徒の一人として喜びに堪えない次第である。

言うまでもなくフランスの国立図書館所蔵の満洲本のコレクションは、大英博物館のそれと並んでヨーロッパにおける最大の規模のものである。私は曾つて一九六三年から六四年にかけてパリに滞在中、殆ど毎日国立図書館の東洋写本部(Division des manuscrits orientaux)に通つて満洲本を調査し、その豊富さに驚嘆したものであった。数年前ヨーロッパに在外研究に行かれた松村潤氏より、同図書館の司書ピュイレモン(J.-M. Puyraimond)氏によつて同館所蔵の満洲本

の目録が作成されつつあるとの報に接し、その完成の日の速かなるを願つていたのであるが、ここにようやく実現された。目録の作成など一見何でもないようでも、実際には容易なことではない。長年にわたつてこの困難な作業に当られたピュイレモン氏、並びに同氏に対して終始多大の援助を与えられたロンドン大学名誉教授サイモン(W. Simon)氏及び上司の司書長セギイ(M.-R. Séguin)氏に敬意を表したい。

ヨーロッパの図書館における満洲本の蒐集は、米国や日本のそれと異り、非常に長い年月がかけられている。わけてもフランスの国立図書館の満洲本蒐集の歴史は古い。今回刊行された『満洲本目録』の巻頭に載っているセギイ氏の緒言には、その経過が詳しく述べられている。すなわちその満洲本は、十七世紀のルイ十四世の時代に康熙帝のもとに派遣されたイエズス会宣教師ド・フォンタネ(J. de Fontaney)が持帰つた書物にまで溯るのである。当時フランスが中国に大きな関心を寄せ、学問のある宣教師をしきりに派遣したことはいまさら説くまでもない。彼等は中国に来るとまず満洲語を学習し、満洲本について興味をもつと共に、欧文の満洲語訳をも試みたのであった。本目録の巻頭に口絵として写真が載せられている『西医人身骨脈図説』(Wargi nanu oktosilame niyalma beye siranggi sudala nirugan-i gisun)なる写本は、ブーウヤ(J. Bouvet)とパルナン(D. Parrenin)によ

つて作られた満文の人体解剖図説で、コペンハーゲンの王立図書館 (Det Kongise Bibliothek) 所蔵の類似の写本と共に極めて珍貴なものである。セギヤ氏の緒言には、この写本を始めとして、以後二十世紀に至るまで二百余年にわたる満洲本の蒐集の状態が具体的に記されている。そして目録に著録されている各書物の説明をみると、アンリオ (J. J. M. Amiot)、ラングレス (L. M. Langles)、レックヤギ (J. R. A. Remusat)、ジュリアン (S. Julien) など十八、九世紀の有名な中国学者の筆跡のあるものがままあり、さすがに中国研究に長い伝統のあるフランスの満洲本と言わざるを得ない。

このようにフランスの国立図書館の満洲本は、主に十八、九世紀に中国から齎されたものであるが、二十世紀に入ってからもさらに増加した。特にペリオ (P. Pelliot) の尽力によって集められたものが多く、その数は七十八点に達するという。ともかく何世紀にもわたる蒐集の結果であるから、他に余り存在しない珍しい満洲本も少くない。例えば、刊本では沈啓亮の『四書要覽』(Se su oyonggo tuwara birhe) や『蒙古律例』(Monggo fatun-i birhe) など本目録の説明にも稀観 (très rare) と特に記してゐるよう極めて珍しいものである。写本では『無幽決字書』(Tongki fuka aku hergen-i birhe) など前記の『西医人身骨脈図説』と共に最も珍重すべきものであろう。私は會つて自分なりに同図書館で調査した

結果を、本誌第四八巻第二号(一九六五)所載の「欧米現存の満洲語文献」及び『東洋文庫欧文紀要』(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko) 第二十六号(一九六八)所載の「満洲語文献の現況」(Present State of Preservation of Manchu Literature)の中で述べておいたから参照された。

このフランスの国立図書館ではもともと満洲本は漢籍と區別せず、中国本の部に入れられていたが、二十世紀に入って始めて満洲本として独自に扱うことになった。そのため初め中国本としての番号がついていた満洲本に、新たに満洲本としての番号がつけられ、ドイツ人のバルフ (W. Baruch) によつて目録 (Catalogue des livres et manuscrits mandchous du nouveau fond chinois (et du fond Fournont) à la Bibliothèque Nationale) が作られた。この目録は出版されず、稿本のまま東洋写本部に備付けられていて、私も何かと参考させて貰った。すべて百八十五頁から成り、一冊に製本されているが上下二部に分れ、一番から一六〇番までの満洲本が著録され、一点一点かなり詳しい解題がついていたかと記憶する。ただその排列の順序に体系がないので、一九三七年に至り当時バリに滞在していた中国人のチベット学者于道泉 (Yu Tao-s'ian) 氏によつて、主として満洲語の書名をアルファベット順に排列した索引 (Index des titres man-

chous et français du fonds manichou dans la Bibliothèque Nationale, 1937) が作られた。すべて十二頁より成りタイプで打ったもので、漢字も手書きで記入されており、検索に頗る便利である。そしてこの索引には、バルフの目録に著録されていない一六一番以下の約三十点の満洲本も入っていたかと思う。

私は一九六三年の夏、ロンドンで初めてサイモン氏にお目にかかった際、同氏がその少し前にパリに行き、国立図書館で満洲本を調査されたことを伺った。そして当時同館の司書であったギニヤール (M.-R. Guignard) 氏の依頼を受けてバルフの目録を訂正増補される計画があるとのことであった。セギイ氏の緒言及びそれに続いて記されているユイレモン氏の序論には、今回の目録の作成についてそれ以後の経緯が述べられている。すなわちサイモン氏は一九七〇年に数ヶ月パリに滞在して、満洲本の目録の改訂、特にペリオの蒐集した書物の確認や組織的な索引の基礎作りに努められた。

その間、中国学者である司書のピュイレモン氏に満洲語を教えられたという。このようにしてサイモン氏の指導宜しきを得て目録の作成は軌道に乗り、以後、ピュイレモン氏はサイモン氏の援助と注意を受けつつ目録の作成に邁進された。その結果、ようやく一九七六年の末に原稿が完成し、さらに数年を経て七九年に至って出版された。最初一九六三年に計画が

立てられた時から数えれば、十六年もの長い年月が経過しているわけである。

ところで本目録にはすべて二百九十四点の満洲本が著録されている。ロンドンの目録では写本、刊本、複製本と三部に大別されているが、本目録ではそのような区別をせず、三者取り混ぜて一番から二九四番まで一連番号がつけられている。満洲語の記されている書物はすべて満洲本として扱っている。漢文はもとよりモンゴル語、朝鮮語、チベット語、ウイグル語、サンスクリットなどの入っているもの外、ラテン語やフランス語などヨーロッパ語の入っているものもすべて著録されていて、その点はロンドンの目録の場合と同様である。すべて二百九十四点ではあるが、重複するものも一点として数えられているから、実際の種類はこれより少い。しかしパリの満洲本の多くは古く洋装本に製本されているので、何種類もの書物をセットとして一点としている場合もある。例えば『上諭八旗』『上諭旗務議覆』『諭行旗務奏議』の三書は一括して一五五番となっているという具合である。二百九十四点の満洲本の排列は、内容により経書、哲学、言語など十五の項目に大別され、さらにそれがいくつかの小項目に細分されているものもある。しかしそうした分類の項目名は巻末に表示されているだけで、本文には特に記されていない。

次に各書物についての記述であるが、書名は満洲語はじめ諸語をすべてローマ字に転写し、漢語には漢字も記している。満洲本の多くは漢文の書物の翻訳であるが、満漢合璧の場合ももとより、満洲文だけの場合も原典の漢字の書名を記入している。これまたロンドンの目録と同様である。そして各書物について著者、巻数、冊数、寸法、序の年月日、刊記、紙質、など書誌的な説明と共に内容の簡単な説明も記されている。さらに参考すべき文献として李徳啓の『満洲書籍聯合目録』やフックス (W. Fuchs) の『満洲文書誌』(Beiträge zur manjurischen Bibliographie und Literatur, Tokyo, 1936) など三十一点を巻頭に列挙し、省略記号によって各書物の説明の中にその該当頁数を記していて便利である。この参考文献にはロンドンの目録にみえない『イエズス会文庫目録』(Bibliothèque de la Compagnie de Jésus, Ré-impr. Louvain, 1960) などカトリック関係のものが挙げられているのも、キリスト教に関する満洲本が三十七点もあるフランスの国立図書館の蔵書の性格によるものであろう。その他、洋装本としての体裁が記されていたり、書物の来歴が記されているものがある。ペリオの蒐集に係るものはずべて明記されているが、クラブロート (J. Klapproth) の旧蔵というものもかなりあり、フランスの満洲本の歴史の重みを感じさせる。

なお巻末には前記の分類表の外に人名及び書名をアルファベット順に並べた索引、並びに画数順による漢字の索引がつけられていて、これもまた甚だ便利である。さらにその後には満洲本の新旧番号対照表と、写本の番号のリストが載せられている。本文の各書物の説明の最後には、中国本及び満洲本としてのそれぞれの旧番号が記入されているが、巻末に満洲本としての新旧番号対照表があるのは、私など旧番号によって以前調査した者にとつたいへん有難いのである。

以上、本目録の概略について述べた。通覧して気付いたところでは、九一番の東洋文庫複製の『御製五体清文鑑』の原本を北京の故宮博物院所蔵本としたり、二九三番の『奉天誥命』の誥命の字を告名と誤ったりするなど瑕瑾がないではないが、満洲字の長老のサイモン氏が長年指導され、満洲語をマスターしたビューレモン氏が非常な努力を払われただけあって、まことによく行届いた目録と言わねばならない。重ねて関係諸氏の労苦を多とすると共に、今後他の図書館においてもこれに倣って次々と満洲本の目録を作られるよう切望してやまないものである。

(Catalogue du Fonds Mandchou par Jeanne-Marie Puyrainond, sous la haute direction de Walter Simon et de Marie-Rose Séguy, Paris : Bibliothèque Nationale, 1979, 178 pp. 6 planches.)